

〔視聽草 三集 七〕古狸怪

けり、是更にうける事にあらず、ちかきふしぎ也、うたがひなき狸のまわざなりけり、
龍吟すれば雲を生じ、虎嘯ば風を起す、自然の妙なりと云べからず、爰に文政十一年三月中頃、雲
峰の家に久敷仕ひし老婦有り、やちと云り、されども歳七十餘りになりければ、名を呼人もなく
唯ば、と云れけり、然るにば、が親族皆絶て、引取養ふ者もなく、懸るべきたよりも無れば、
千秋を主人の家にすこせしと憐みおきける處に、其年の三月中頃より何の病もなきに氣絶し
て、暫くいきも通はざりしが、一時程過ければ漸く心付けれども、身體自由ならずして、唯日増に
食事進み、常に十倍して其間に餅菓子を好みければ、好みのまゝにあたへ、老の身のあすもまら
ぬいたはしさに、老婦の云まゝに食物を好みに應じて與へし處、三度の食事の間に口の休む間
なし、死に近き者なれば好みに隨ひ、云まゝに與へけり、手足不叶に、夜に入れば心面白げに唄謠
毎夜々々絶ゆく事なく、時には唄ふ友來れり、何か高らかた獨り言云て咄し、又はやし唄ひて
おもしろく聞へけり、友の名などい、て、夫より聲高く小唄を夜半頃迄興に入り、酒に酔たるあ
りさまにて、熟睡して朝迄靜に寝むりけり、かゝる病人もあるものかと、松本良輔なる醫師に脈
伺はせしに脈絶てなし、少し有が如くなれども脈にあらず、奇なる病體にして藥法つかず、全く
老もふつもりて心氣を失ひ、血道とちて脈絡通せず、唯おぎなふの外なしとて、時々見舞をなし
て異病なりと申ける、かくて月日を経る間に、半身自然と減じ、後には骨出て穴明き、穴の所より
毛のはへたる様なもの見ゆると看病人申ける、次第に暑に向ひ、まうき付日々腰湯など致し、
たはりければ、ばゝも其惡さを知たるや、まきりに禮を申けり、食を養ひ遣すには小女を付置、食
物を好めば應じて與へ、主人も憐れみ遣しけり、比も秋立冬に移りければ、寒さにも向しゆへ著
類まで取替、其著類を能々見るに、狸の毛色なる毛夥敷、また其香ひ毛もの、匂ひ高く鼻をとを